

令和7年度学校教育教員養成課程  
(学校推薦型選抜Ⅱ型)

小学校教育専修家庭科教育コース  
中学校教育専修家庭科教育コース

小論文

表紙

[解答上の注意]

1. 試験開始後、表紙1枚、問題用紙1枚、解答用紙1枚、下書き用紙1枚があるか、確認しなさい。  
もし、欠落のある場合には挙手して、そのむねを申し出なさい。
2. 解答用紙の受験番号欄に、受験番号を忘れずに記入しなさい。
3. 解答は、指定された解答用紙に、指定された文字数で、横書きで記入しなさい。  
句読点も1字に数えます。
4. 解答用紙の太線  部分には、何も記入しないようにしなさい。
5. 試験終了後、解答用紙を回収します。(全1枚)  
表紙を含め、問題用紙、下書き用紙は各自持ち帰りなさい。(全3枚)

令和7年度学校教育教員養成課程  
(学校推薦型選抜Ⅱ型)

小学校教育専修家庭科教育コース  
中学校教育専修家庭科教育コース

小論文

問題用紙 全1枚

**問題** 次の文章を読んで、設問に答えなさい。

日本では封建社会から近代社会へと転換した明治時代以降も、男尊女卑、良妻賢母の思想は、家制度や旧民法、女子教育の中に根強く残ってきた。第二次世界大戦後、家制度は廃止され、1946年公布の日本国憲法のなかに男女平等が明記されたが、その後も意識面、制度面ともに平等への歩みは十分ではなかった。

家庭科は周知のごとく、政治、経済や社会の影響を色濃く受けてきた教科である。1947年に民主的な家庭を作る男女共学の教科として出発しながらも、1960年代の高度経済成長期に性別役割分担を強化する政策を背景に、1970年には高等学校の家庭科が女子のみ必修の教科へと改訂された。その後、国連の女性差別撤廃条約（1979年採択、日本政府1985年批准）をはじめとする国内外の性差別撤廃の流れの中で、1989年の学習指導要領改訂（1994年開始）により、家庭科はようやく男女ともに必修で学ぶ教科となった。それから約四半世紀が経過した2020年現在、男女必修の最初の世代が40代に入り社会の中核を担っている。この世代は「イクメン」の名称に象徴されるように、その上の世代よりも子育てへの関心が高く、男女共学家庭科の影響も伺われる。実際に日本家庭科教育学会が2016年に実施した全国調査では、高校家庭科男女必修世代はそれより上の世代に比べ、特に男性の場合、家事・育児参加やパートナーシップの意識や実践度がより高いという結果がでている。

法律面でも1999年には男女共同参画社会基本法が制定された。2019年の総務省の調査によると、女性の15歳から64歳までの就業率は過去最高の70.9%となり、女性も男性も生涯を通じて働くことが前提の世の中になりつつある。「仕事も家庭もともに大切に」の認識は高まっているが、しかしその一方で、職場でのセクシャルハラスメントや性被害、賃金格差、教育機会の不平等（近年、医学部入試の女子受験生への不利な扱いが指摘された）など、今なお、性差別意識が根強いことも事実である。（中略）家庭科では、「協力・協働」の視点から、男女平等や家庭でのパートナーシップについて生徒の理解を深め、家庭も仕事も大切にする生活主体を育てたい。家族領域の学習において、そうした社会を実現する市民性意識を育むことが大切である。

（荒井紀子他『SDGsと家庭科カリキュラム・デザイナー 探究的で深い学びを暮らしの場からつくる（増補版）』教育図書、2022年による。表記を一部変更した。）

注：家庭でのパートナーシップとは家庭の構成員同士の協力関係のことをいう。

- 問1 男女平等の実現に向けて、家庭科がどのように変化してきたかを200字以内にまとめなさい。
- 問2 家事や育児に関する家庭でのパートナーシップの課題を1つ取り上げ、その課題を解決するために、家庭科の授業においてどのような学習内容が考えられるか、400字以内で具体的に説明しなさい。